

色紙は再び書かれない

天野 公義

箱根で行われた宏池会の青年研修会の時のことである。休憩時間の時、各地から集まった青年達にかこまれた大平さんは、にこにこしながら、次から次と、青年達と一緒に写真にとられていた。そのうち色紙を持った青年達が、「揮毫をお願いします」といって列をつくった。大平さんは気軽にうなずき、椅子に腰かけ、机の上に沢山の色紙を置き一枚一枚丁寧に、しかも素早く、あの独得の味のある字で書き出した。ところが驚いたことには、書かれる文字、文句が次々と変わってゆくのである。私は次から次へと書き上げられてゆく異なった色紙を見ながら、大平さんの頭脳はどうなっているのだろうか、私などはとうてい足元にも及ばぬ素晴らしい頭脳だと、心から感服した。同時に書き損じがなく、字体の乱れのないのにも敬服した。

大平さんのような忙しい方に、私個人に関係したことでの会合にご出席を願うことは極力さけた。しかし、後援会や選挙関係での会合では、幹部が「どうしても大平さんにきてもらわねば」というので、時にはお願いした。ご都合がつけば必ず出席して下さり、あの独得の口調で、全身をゆすりながら演説をされた。そこには「なすべきことと、なすべからざること」というような、また「国際社会の一員として信義を重んじ、責任を果たす外交を着実に展開し」とか、現実の上に立って総合と選択の上、一歩前進、二歩前進の政治哲学が語られ、聴衆に多大の感銘を与えていた。特に外交関係を論じる時には、常に相手国の立場、考え方、文化等を前提にし、相手の立場からわが国をどう見ているか、そして日本の現在の状況はこうだから相手国との関係をどうもってゆけばよ

いか、という基本をはずしたことはなかった。私はこのような考え方を複眼逆視的思考と思っている。従来わが国の指導者に寄せられる期待は、「わが国は」という考えで、大風呂敷をひろげる単眼直視的思考である。相手の立場を考へることなく、大向うをうならせるように、わが国の要求、希望、空手形を述べるのである。これが戦前特に顕著であり、戦争から敗戦にいたった最大の原因であり、戦後においても、わが国の不信をまねく種をまいていたのである。大平さんは外相の時も総理の時も、常に相手国に聞かれ読まれてもよく理解されるように、しかも約束事は必ず実行できるように、相手の立場を考へて発言されていた。

私達に対しても、それぞれの立場がどうなっているかもよく理解された。私の個人的なお願ひもよく聞いて下さり、また私にとってどうしてもきていただきたい個人的会合にも足をはこばれ、感謝したこともある。

閣僚をしている時も党の役員をしている時も、総理になられていた時も、いつも変わらぬ態度で接して下さっていた。このことも凡人のできることではない。深い人生哲学の上に、常に相手の立場を考へ、物事を処理され、身体を動かしておられたのである。五十四年九月十七日の総選挙公示の日、十一時から私の選挙事務所開きをやっていった。大平総理は上野公園で第一声の演説を行い、次の赤羽の会場に向う途中、コースを変更し、予定に入っていないかった荒川の私の選挙事務所に突然寄つて下さり、私をはじめ千名を超す事務所幹部、聴衆を前にして演説を下さつた。全員心から感銘したのはいうまでもない。

総理になられてから数枚の色紙と二枚の額をたのまれたので、お忙しいと思ひながらお願いした。それから約一年後、学校と某会館宛の額二枚を書いていただいた。あとの色紙は近日中にということで、その後、大平総理の急逝となった。あの額は絶筆だったかも知れない。色紙は再び書かれない。私は選挙の時いただいた「祈必勝」の色紙だけだ。人間的にも政治的にも素晴らしい総理を失つて悲しみは尽きない。

(衆議院議員・元自治大臣)